

受験番号

- ◇問題用紙は九枚、解費用紙は一枚。 ◇答えはすべて別紙解費用紙に書きなさい。
- ◇抜き出しなど字数指定の記述問題は、句読点その他の記号も一字に入れます。
- ◇選んで答える問題は、記号で答えなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合で、途中文章の一部を省略したところがあります。

その頃私は、文系の学部に所属していて、まさか自分が数学に夢中になるとは思ってもいない。だが、振り返ればあの日に私は後戻りのできない¹ 数学の道への最初の一步を、確かに踏み出していたのである。

大学には数学好きの友達がいて、いつも私にいろいろなことを教えてくれた。中でも彼が聞かせてくれる、数学者の奇抜で埋めきれないエピソードは、格別に面白かった。

素数の研究に夢中になるあまり、服を着るのを忘れたまま登校してしまった先生の話とか、普通の授業があまりにも完璧^{かたがへ}なので、授業中に一瞬行き話まっただけで「あの先生が止まったぞ！」と教室全体が沸いた話とか、にわかには信じがたいような、愉快な話がたくさんあった。

アルキメデスやオイラーやガウスのような、過去の偉大な数学者の名前は多少は知っていたけれど、グロタンディークやベルマン、グロモフやウィッテン、ましてや日本の大学にいる同時代の数学者についてはほとんど何も知らなかった私にとって、刺激の話ばかりだった。そんな彼のおかげだろうか、岡潔という名前だけは、どこかで聞いた覚えがあったのである。

私はその日手にした『日本のこころ』を、夢中になって読んだ。そこには今まで知らなかった^a コウタイな世界が開けているように思われた。それでいて、² どこか懐かしいような、前からよく知っている世界のような、不思議な感覚に包まれた。そこには、³ 狭い意味での数学を超えて、生きること、あるいは「わかる」ことについて、全身の実感のこもった言葉が並んでいたのだ。

岡潔によれば、数学の中心にあるのは「情緒」だという。計算や論理は数学の本体ではなくて、肝心なことは、五感で触れることのできない数学的対象に、関心を集め続けてやめないことだという。Wの別も、Xの枠すらをも超えて、大きな心で数学に没頭しているうちに、「内外」二重の窓がともに開け放たれることになって、『清冷の外気』が室内にはいる」のだと、彼は独特の表現で、⁴ 数学の喜びを描写する。

私は高校までバスケットボールに夢中だった。勝ち負けよりも、無心で没頭しているときに、試合の「流れ」と一体化してしまう感覚が好きだった。バスケットに「真実」というものがあるとすれば、それは正しい理論を身につけることでも、戦術をたくさん覚えることでもなく、ただバスケットという行為に没入しきって「体得」するほかないものだと感じていた。

岡潔の言葉を読んでいると、なぜか不思議と、バスケットに捧げた日々を思い出した。この人にとって数学は、全身身を捧げた行為なのだった。頭で理屈を捏ねることでも、小手先の計算を振り回すことでもなく、生命を集中して数学的思考の「流れ」になりきることに、この人は^b ムシヨウの喜びを感じていることが伝わってきた。

私は、岡潔のことをもっと知りたいと思った。彼が見つめる先に、⁵ 自分が本当に知りたい何かがあるのではないかとも思った。簡単に言えば、「この人の言葉は信用できる」と直観したのだ。

数学と身体を巡る私の旅も、ここから始まったのである。岡潔の語る数学は、それまで私が知っていたものとはまったく違った。そこには、生きた身体の響きがあった。「数学」と「身体」——とてつもなくかけ離れて見えるこの二つの世界が、実はどこかで深くで交わっているのではないか。その交わる場所を、この目で確かめたいと思った。ならば、数学の道へ分け入るしかない。私は、数学を学ぶ決心をした。

【中略】

生き物は、ただ生きていてだけで、次々と困難に出会う。まったく想定外の、想像もしない新たな課題にぶつかることもある。そんなときにも生物は、自分のYで、何とかやりくりをしてきた。

指を使って数えるのもそうである。指はもともと、モノを掴む^{つかむ}ために使われてきたのであって、数えるための^c キカンではない。実際、人間の長い進化の^d ライレキの中で、「数える」必要に^e セマられることはごく最近までなかっただろう。だからこそ、いざその必要にセマられたときには、それまでモノを掴むために使っていた指を「転用」するほかなかつたのだ。あくまでその場凌ぎ^{しのぎ}の方法だから、これにもしわよせがある。

普通に指を使って数えると、十までしか数えることができない。A、「十」が数えるときの単位として定着した。無限にある数の中で、「十」が特別扱いされなければならない数学的な理由など、どこにもないのにである。

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語 (その二)

実際、コンピュータの中で数字は、二進法で表現される。何と言っても、二つの記号だけですべての数を表せるのが魅力だ。その点、二進法は十進法よりもはるかにエレガントだが、世界中の大部分の人は十進法を使う。それは、身体を使って数を扱う人間にとって、十進法がたまたま運用上、もつとも **Z** であったというだけのことである。

道具というのは、無^む闇^{やみ}に作れるものではない。それが効果的に機能するためには、人間の身体に寄り **f** ソウ^{ソウ}必要がある。はさみの持ち手は、指が通りやすく力が伝わりやすいように、人間の身体の特長な条件にうまく適合すべく作られる。そうして道具は、大なり小なり、使用者である人間の姿を、その構造の中に反映していくのだ。

数学で使われる様々な道具にも、よく見ると人間が映り込んでいる。 **B** 「数直線」という概念がある。0を中心として一直線上に、右に向かって正の数、左に向かって負の数が順番に並ぶという、数の世界の **g** キカガク^{キカガク}的な描像である。

離散的な数と、連続的な直線を一つに融合してしまうのだから、考えてみれば大胆な発想だ。 **C** 「数」とキカガク的な「位置」は、概念としては別物である。それを一緒にたにしてしまうのだ。

こんな大胆さにもかかわらず、ちゃんと教えれば小学生でも数直線を理解できる。それはなぜかと言えば、数と直線を結びつけてしまう衝動が、初めから人間の中にあるからである。人間の脳の中では、数と位置とが極めて近い関係にある。だからこそ、**6** 数字の世界を直線として想像することが自然に感じられるのだ。

D 私は脳科学的な **h** チケン^{チケン}を引くことで、すべてを脳の話に還元するつもりは、**7** 毫^{ちゆ}もない。私たちの経験している世界のすべてが、脳によって生み出されていると考えるのは誤りだろう。脳は私たちが経験する世界の唯一の原因ではない。

C 脳の第一の働きは、生きるための有効な行為を生み出すことにある。その最も大切な仕事は、効果的な行為を生成するために、環境と身体を仲介することだ。そうして生み出される様々な行為の繰り返しがまた、逆に少しずつ私たちの脳を形作っていく。脳は、人が経験する世界の一つの原因であるとともに、人が様々な世界を経験してきたことの帰結でもある。その脳だけを環境や身体的な行為の文脈から切り離し、そこにだけ特権的な地位を与えるのが、**i** ケンメイ^{ケンメイ}とは思えない。くどいようだが、私が強調したいのは、次の点である。

数学的思考は、あらゆる思考がそうであるように、身体や社会、さらには生物としての進化のライレキといった、大きな時空間の広がりや舞台として、**j** セイキ^{セイキ}する。脳内を見ている、あるいは肉体の中だけを見ている、そこに数学はないのだ。

「わかる」という経験は、脳の中、あるいは肉体の内よりもはるかに広い場所でセイキする。にもかかわらず、自然科学が理性をことさらに強調して、心的過程のすべてを脳内の物質現象に還元しようとすることで「人の心は狭い所に閉じこめられてしまっている」。岡潔は、このように嘆いた。

この身体、この感情、この意欲といえは本来はすむところを人はなぜか、自分のこの身体、自分のこの感情、自分のこの意欲と言わずにはいられない。ところが数学を通して何かを本当にわかろうとするときには、「自分の」という意識が障害になる。 **E**

8 「自分の」という限定を消すことこそが、本当に何かを「わかる」ための条件ですらある。

「わかる」という経験の本来の深さを直截^{ちてつ}に示す例として、岡はしばしば「他の悲しみがわかる」ことについて書いている。

他の悲しみがわかるということは、他の悲しみの情に自分も染まることである。悲しくない自分が悲しい誰かの気持ちを押し量り、「理解」するのではない。本当に他の悲しみがわかるということは、自分もすっかり悲しくなることである。「他の」悲しみ、「自分の」悲しみという限定を超えて、端的な「この悲しみ」になりきるのだ。「理で解る^わ」のではなく、情がそれと同化してしまうことである。

(森田真生『数学する身体』より)

注1 岡潔……日本の数学者(一九〇一―一九七八)。多変数関数論の研究にめざましい発展をもたらし、現代数学に大きく貢献した。

注2 清冷の外気……『岡潔集第二巻』『絵画』より引用。

注3 人の心は狭い所に閉じこめられてしまっている……注2と同様。

問一 ―― 1 「数学の道への最初の一步」とは、具体的にどのようなことを指しますか。その説明として、最も適当なものを次から選びなさい。

- ア 数学好きの友達との出会い
- イ 数学者の奇想天外な生活ぶり
- ウ 過去の偉大な数学者の業績
- エ 同時代の数学者の活躍
- オ 『日本のこころ』という読書体験

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語 (その三)

問一 — 2 「どこか懐かしいような、前からよく知っている世界のような、不思議な感覚に包まれた」とありますが、作者の実験に基づいた場合、それはどのような感覚に包まれることですか。本文中から三十一字で探し、その最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問二 — 3 「狭い意味での数学」とはどのようなものですか。本文中から二か所、十字と十三字で抜き出さなさい。

問四 空欄 **W**・**X** に入る語を、それぞれ次から選びなさい。

- A 因果 I 生死 U 真偽 E 善悪 O 自他 K 時空 H 好悪

問五 — 4 「数学の喜び」とはどのようなものですか。本文中から二十五字以内で抜き出さなさい。

問六 — 5 「自分が本当に知りたい何か」とはどういうことですか。本文中から「の意味。」に続くように、十七字で抜き出さなさい。

問七 空欄 **Y** に入る語句を次から選びなさい。

- A 経験と行為 I 生命と感覚 U 道具と身体 E 姿と概念 O 環境と進化

問八 空欄 **A**、**E** に入る語として、最も適当なものをそれぞれ次から選びなさい。ただし、同じ記号の空欄には同じものが入ります。

- A たとえば I むしろ U ただし E そもそも O やはり K だから H 一方 U ところで

問九 空欄 **Z** に入る語を次から選びなさい。

- A 感覚的 I 経済的 U 革新的 E 合理的 O 圧倒的

問十 — 6 「数学の世界を直線として想像すること」とありますが、身の回りの「道具」からその具体例を二字以上五字以内で挙げなさい。

問十一 — 7 「毫もない」は、「一()もない」という表現に言いかえることができます。()に入る「数量をあらわす単位」をカタカナ二字で答えなさい。

問十二 — 8 『自分の』という限定を消すことこそが、本当に何かを『わかる』ための条件ですらある」とありますが、その理由として、最も適当なものを次から選びなさい。

- A 本当に何かを「わかる」ためには、自分を中心にして物事を考える姿勢は他者への理解を妨げることになるから。
I 本当に何かを「わかる」ためには、自分という意識を放棄して周囲の環境と自分が一体化しなければならないから。
U 本当に何かを「わかる」ためには、自分自身とわかろうと思う対象とが同化するということが求められるから。
E 本当に何かを「わかる」ためには、自己と他者との間での相互理解を成立させる、密な意味疎通が不可欠だから。
O 本当に何かを「わかる」ためには、未体験の感情であってもその感情に至る心的過程を想像しなければならないから。

問十三 二重傍線部 a、j について、カタカナを漢字に直しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、一部表記を変えています。)

行き遣い(はな)は外(はな)に出(で)ていたので、伏見中納言(ちゅうなごん)といひける人(ひと)のもとへ、西行法師(さいぎょう)は、行(い)き来(き)たつね(と)ね(と)けるに、あるし(ある)はありきた(き)たがひ(ひ)たるほど(ほど)に、侍(さむらい)の出(い)でて、「何事(なに)いふ法師(ほうし)ぞ」と言(い)ふに、縁(ゆかり)に尻(しり)かけて居(ゐ)たるを、「けし(け)かる法師(ほうし)の、かくし(かく)しれ(れ)がまし(ま)きよ」と思(おも)ひたるけし(け)きに、侍(さむらい)ども、ならみお(なら)みお(お)せたるに、籬(さだ)の内(うち)に、箏(そう)の琴(こと)にて秋風(あきかぜ)をひ(ひ)きすま(ま)したるを、**A**聞(き)きて、西行(さいぎょう)、この侍(さむらい)に、「物申(ものま)さむ」と言(い)ひければ、「憎(にく)し」と思(おも)ひながら、立(た)ち寄(よ)りて、「何事(なに)ぞ」と**B**言(い)ふに、「籬(さだ)の内(うち)へ^①まら(ま)ら(ら)せたま(ま)ぐ」として、

2 ことに身にしむ秋の風かな

顔(かほ)の横(よこ)のおこ(こ)骨(ほね)のあたり(あたり)を、言(い)ひ草(くさ)よ、平手(ひらて)でた(た)いたと、言(い)ひでたり(たり)ければ、「憎(にく)き法師(ほうし)の言(い)ひ事(こと)かな」とて、かま(か)ちを張(は)りてけり。西行(さいぎょう)、^②はう(は)う(う)帰(か)りてけり。後(のち)に、中納言(ちゅうなごん)の帰(か)りた

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語 (その四)

るに、「³かかるしれ者こそ候ひつれ。張り伏せ候ひぬ」とかしこ顔に語りければ、「西行にこそありつらめ。ふしぎの事なり」と
不倫侯に思ひなごた
て、心うがられけり。⁴この侍をば、やがて追ひ出だしてけり。

(『今物語』より)

注1 伏見中納言……源師仲(一一一五～一一七二年)。

注2 西行法師……平安時代末期の歌僧。歌人として後世の人に影響を与えた。

問一 ……①②を現代仮名遣いで書きなさい。

問二 ……ABの動作主(主語)をそれぞれ次から選びなさい。

ア 伏見中納言 イ 西行法師 ウ この侍 エ 秋風楽を弾いていた人 オ その他

問三 ……1「物申さむ」の現代語訳として、最も適当なものを次から選びなさい。

ア 申し上げたい イ 申し上げない ウ 申し上げさせよう エ 申し上げたのだろう オ 申し上げてしまった

問四 ……2「ことに身にしむ秋の風かな」の「ことに」には「ことさら特別に」という意味ともう一つの意味が含まれています。
最も適当なものを次から選びなさい。

ア 言に イ 古都に ウ 事に エ 琴に オ 毎に

問五 ……3「かかるしれ者」について

(1) 誰のことを指しますか。次から選びなさい。

ア 伏見中納言 イ 西行法師 ウ この侍 エ 秋風楽を弾いていた人 オ その他

(2) 具体的にどのような振る舞いを指して「しれ者」と言っていますか。適当なものを二つ選びなさい。

ア 恐れ多くも伏見中納言を訪ねた振る舞い。 イ 縁側に腰を掛けて座っていた振る舞い。
ウ 侍どもをにらみつけた振る舞い。 エ 連歌で上の句を求めた振る舞い。
オ 侍を恐れて逃げ帰った振る舞い。

問六 ……4「この侍をば、やがて追ひ出だしてけり」について、中納言はどうして侍を追い出したと考えられますか。その理由として適当でないものを選びなさい。

ア 侍が平手打ちをして西行法師を追い返したから。 イ 侍が訪問者の素性を確かめもしなかったから。
ウ 侍のせいで西行法師と自分が行き違いになってしまったから。 エ 侍が連歌の下の句の趣を理解できなかったから。
オ 侍が西行法師を追い出したことを得意げに語ったから。

問七 西行法師の影響を受けた一人で、元禄二年三月に江戸を出発し、関東・奥羽・北陸を経て大垣に至る紀行文を書いた人について

(1) 名前を答えなさい。

(2) その紀行文の作品名を答えなさい。

(3) 彼の作でないものを次から一つ選びなさい。

ア 夏草や兵どもが夢の跡 イ 草の戸も住み替わる代ぞ雛の家 ウ 五月雨を集めて早し最上川
エ 閑かさや岩にしみ入る蝉の声 オ 春の海終日のたりのたりかな

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合で、途中文章の一部を省略したところがあります。

父を亡くした私は墓地の見物のために「都宮八王子霊園」に向かう。同行の馬場くんはかつての教え子である。

ゆるい登り坂道は、ゆるいながらも次第に頂上に近づいているようである。墓石屋の一群を過ぎると、道の両側には墓石の頭がぼつぼつと見えて来て、左手にやっと「都宮八王子霊園」の門が見えてきた。いよいよである。だけど入口には大きな鉄の柵がしまっている。あれ? と思った。腕を見るともう五時半になる。ちょっと驚いた。やっとの思いで着いたのに、もうおしまいだらうか。

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語 (その五)

いやおしまいなんて、これは映画とか展覧会ではないのだぞ。お墓に終りがあるなんて。1 私は思わず馬場君と顔を見合わせる。ちょっと失敗した顔である。

鉄柵の間からのぞくと、なだらかな丘陵に墓地の一部が見えている。きれいな芝生の上にきちんと並んだ墓石群は、夕日を受けて、もうほんのりと赤く染まりはじめている。これは慌ててしまう色調である。出足が遅れたり、降車駅を間違えたり、お寿司を食べてしまったりで、もたもたと遅れてしまったのだ。これではもし墓地の中にはいれたとしても、一步一步と歩くたびに日はどんどん沈んでいって、ちょうど **A** になりそうである。両足がだんだんと縮んでしまうのではないだろうか。

門の右端にくぐり戸があった。くぐり戸には鍵がかかっている。そうと押し、クイーンと鉄のこすれる音がして、中にはいれた。動物園の出口のようだ。その出口の方からこそりとタダではいるようなはやり方だ。まだ建設中の霊園ということもあって、もうこの時間に墓参りの人影はない。はいつて右に管理事務所があって、ドアの上にはもうふんわりと明かりがともっている。消えかけた青空の下の、2 小さな白のお徳頭のような。それがまた頼りないような、慌ててしまう明るさである。

【中略】

事務所の人の説明によると、【中略】墓石は造形自由であるが、大きさは縦横六十センチ、奥行四十二センチの範囲内のものに限る。しかし高さが六十センチとすればずいぶん小さな墓石である。私は首を伸ばして、もう一度窓越しに墓地を眺める。背の低い同じ規格の墓石がきれいに並び、何かしらもの足りない感じでもある。要するにここでは平等が基本となっているのだ。でも3 やはり何か不満な感じが残る。私はもちろん貧民大衆であるから結局は平等になるほかないと考えているけど、何でも平等を好むというのではない。たとえば父の墓は一メートルくらいの高さのものにしてその両側に一メートルくらいの山茶花を植えたいかと思っても、平等のもとでは六十センチで押さえられ、樹を植えるのは規則違反ということになる。

「しかしこの霊園はですね、墓地というものをなるべく安く都民に提供するためのものですから、これはやはり高さも制限しないとですね、墓地は安くても結局墓石が高くなってしまふことになる。そうでしょう。一人が大きい墓石を建てればやはりみんなが大きい墓石を注文することになってしまつて、そうすればあなた、安い墓地を提供するという意味がなくなってしまふわけですよ」

事務所の人はそういつて説明してくれた。聞けばなるほどと思う。墓地にもやはり **B** とか流行とかいうものがあるのだらう。

【中略】

道の向い側には私営霊園があった。坂道をたどり着いたとき、道の両側に霊園が見えて両方とも都営の八王子霊園だと思っただけで、向い側のはまた別のものであった。そちらはお金さえ払えばいくらでも大きな立派なお墓が建てられるという、いわば金本位制の霊園なのである。つまり一本の道をはさんで左側には平等主義の霊園、そして右側には資本主義の霊園があるというのであった。

私たちはおおよその説明を聞いたあと、落日のことが気になって早々に事務所を出た。ドアを開けると、墓地はもうヒンヤリと薄暗くなっている。だけど期待したほど恐くはないのだ。昔は夜の墓地といえば、それはもう幽霊と直結していた。そこが墓地だと思っただけで、その暗い空間が無気味に蠢いていた。塀の外を通るだけでも、ちょっと気持がびくついていた。ところがこの都営墓地は、麻雀の牌が整然と並んでいるというような風情であつて、そういうどろんとした幽霊の出る余地がない。いや広いのに「余地がない」というのもおかしいけれど、芝生墓地というだけあつて木の繁みもない平坦な丘陵がひろがっていて、物陰というものがどこにもないのだ。何か潜んだり隠れたりするような場所がない。幽霊が出ようにも出られない感じである。

それぞれのお墓に近づいてみると、マッチ箱を横にした形の墓石がほとんどだつた。スタイルとしては洋風である。だけどそれが小さくて貧弱である。それに私はこの〇〇風というのがどうも好きになれない。おまげにこのみんないっしょの形の流行というものも……と思つたが、よく考えるとこれは必ずしも好みや流行というわけではなく、結局この都営霊園の制限のもとではこういう形に落ち着くほかないのだらう。

しかし、とやはり考える。お墓にもいろんな個性があつていいはずだ。お墓参りに行くというのは、そういういろんな形のお墓を見て歩くという楽しみも含まれている。それにものごとにはやはり変化というものがないければ……、それにこれではあまりにも墓石が小ぢんまりと小さすぎて……、何か可哀相な……。

もう太陽は完全に地平線の向う側に落ちていって、この墓地は光も陰もつくらずにただ広々とひろがっているだけだつた。まだほんのりと明るさを残した広い空に、ぼつんと一つ一番星、あれはおそらく木星だろう。……私はまるで財産家にもなつたような気持で、墓石の形や大きさなどをせせこましく考えていたのが恥ずかしくなつてきた。そんなことはただ生きている人間の気苦労に過

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語 (その六)

きないのかもしれない。

こういってこぼこのない墓地、物陰のない墓地、幽霊の出る余地のない霊園の方がいいのかもしれないと思った。死んだら死んだであの世の仕事があるのだから、死んでまでこの世に顔を出したがるというのは、死人としては最低なのかもしれない。しかし生きている人間はどうしてもその最低の墓地を造りたがるのだ。それは **X** のためとはいいながら、結局は **Y** のための作業なのではないか。

【中略】

「墓相って知っている？」

私は馬場君に声をかけた。

「え？ ⁴ ボソ？」

「うん、墓相。手相みたいにお墓にも墓相というのがあるんだって」

「ああ墓相ね、墓の相」

「そう。この間週刊誌の対談を読んだらね、墓相研究者というのが話した。それがいちいち的を **C** ているというか、当たって面白んだよ」

「墓相がねえ」

【中略】

「その中にあった墓相の見方というのが面白くてね。あ、う、ふつうのお墓は三段重ねになっているね、いちばん下が平たい石で、その上がちよっと四角い石で、そのいちばん上に柱のように縦長の石があつて名前が彫つてある」

「まあそうですね、ふつうはね」

「それでその墓相の見方によると、いちばん上の石がその人の人格をあらわし、そのつきの石がその人の財産のうち^(持ち)の動産をあらわし、いちばん下の石が^(持ち)不動産をあらわしている」

「へえ」

「だけどそれでね、ただ不動産の石が大きければいいというものではなくて、人格の石だけがやたらと高くてもいいのでもなくて、その三つの石のバランスらしいんだよ。そのバランスを見て良い墓相とか悪い墓相とかあるらしい」

「ふーん、本当なんですかねえ」

「いや本当かどうかは知らないけれど、⁵ でも面白いとは思わない？」

「別に。そりゃ当れば面白だろうけど」

「あのね、この都営墓地を申込む人たちって、うちもそうだけど、だいたいあまり裕福でない人、不動産なんかとは縁のない人たちがほとんどでしょう」

「ぼくもそうですよ」

「それでね、ここの墓石の規則というのは墓相とは関係ないだろうけど、でも結局ここに並んでいるお墓というのは、ほら、動産も動産もなくて、みんな人格の石が一つだけ」

「あ……」

あたりはまた少し暗くなった。芝生の緑がもうほとんど色としては見えなくなつて、低い墓石の並びがぼんやりとしている。「人格」の列が遠くつづいて見えなくなつていて、その向うにはまだ墓石のない敷地だけのところもあつて、さらにその向うにはまだ何も手をつけられていない丘陵がずうっとつづき、その先はもうほとんど夜に近い薄暗かりに溶け込んでいる。風を止めた夢のようなまわりの空気が、さらに夢の底に沈んでいくようである。⁶ けどどこに恐くはない。

【中略】

「死んでいく人間の心理って、みんな結局は同じ過程を通るらしいね」

「え？」

「これは精神医学者の報告なんだけどね、病気などでどうしても死ぬんだということがわかった場合、その患者はまず衝撃を受けて、つぎにその診断を否認したり、運命に向けて怒ったり、神と取引をはじめたり、つぎには激しく落胆したりといういろいろな段階があつて、結局最後には全部の感情を果たしてから自分の死というのをゆつくりと受け入れる状態に落ち着くという」

「うわ、勉強ですねこれは。でもみんなそうなるんですか」

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語（その七）

「うん、これはたくさんさんの臨床例を見てのことらしいけど、みんな最後まで行けばそうなるという。眠るような状態になるという。その最後の状態に至ってはじめて幸せだといえるんだけど、その途中のままで終る人はやはり不幸だろうね」

「嫌ですね。何だかもうそういう話は……」

「その報告で面白いのはね、一生を苦勞し尽くした人とか、自分の一生の仕事に満足している人というのは、容易にその最後の受入れの状態に達するらしいのだけど、たとえば物質的な財産に囲まれた人とか、政治的な人脈などをたくさん持っている人とかいうのは、やはり最後の状態にまで行くのに相当の抵抗があつて、大變な苦勞をするらしいね。その途中の不幸な心理のまま息を引取るのが多いという」

「ああ、それはわかりますね。この世に執着が強すぎるというか、その錘がしっかりとぶら下がっていて、それにいつまでも引張られているんでしょうね」

「うん、ひつつきすぎているんだよ、この世の中に」

私は背中が寒くなってきた。芝生も冷たくなっている。もうだいぶしやがみこんでいる。空がもう少しで真つ黒である。

【中略】

門を出ると、なるほど道の向いには「東京霊園」という私営霊園⁷があつた。門はしまっているけど、やはりくぐり戸には鍵はかかっていない。入口はだいたい同じようなものである。私は馬場君と顔を見合わせる。

「どうですか」

「うん、ついでだから」

くぐり戸をそうつと押すと、その部分だけはやはり都営霊園と同じように、クイーンと鉄のこすれる音がする。

あたりはもうすっかり暗くなっていた。ほとんど真暗である。ただどこどこからか散らばってくるほんのわずかな粉のような光を受けて、墓石の表面がほんのりと浮かび上がっている。こちら側の墓地には、やはり資本主義の名に恥じぬ壮大豪華な墓が並んでいる。暗くて輪郭だけしかわからないけど、まるで記念碑のような大きなものもある。人格、動産、不動産というのがしっかりと守られていて、それが大小さまざまに並んでいて、形もいろいろな主張をもったものが、まるでその場所にじつと生きているようである。ほとんどが石垣や生垣に囲まれていて、いろんな樹木が植えられていて、それがみんなたつぷりと物陰を従えていて、⁷そこには何が潜んでいるかわからない。真暗である。誰も知らない暗闇である。まるで幽霊の溜り場である。見知らぬ幽霊がもうもうとした闇の中に、我が物顔に蠢いている。そんな気配が体のまわりに張りついてきて、私たちはまるで錆びついたロボットの足のように、一歩一歩が固くなった。⁸暗闇が緊張している。あちこちの暗闇が無数の糸で引張られている。その無数に伸びる糸が、どこかの別の、見えないところにつながっている。その見えない別のところから黒い糸がギリギリと引張られて、暗闇がドキン、ドキンと呼吸している。その呼吸がひと固まりになって盛り上がり始める。真つ黒な固まりである。それが突然バサリと舞い上がった。私たちは突然棒になった。舞い上がったのは黒くて分厚い新聞紙のようなものだった。それがバサバサと、まだ出来かけの模型飛行機のように一度ほど低空を舞ってから、重い体をどこか遠くへ運んで行った。たぶん黒い鳥だったのだろう。それが物陰にうずくまって、真つ黒になって呼吸していた。私たちは棒のまま前に進んだ。⁹やはり資本主義には幽霊が出る。錘をぶら下げた幽霊である。錘の先が、錨^かのようになって、この世の不動産にしっかりと食い込んでいる。そうなるともうこの世から出ようにも出られなくなるのは、理屈からいっても当然だろう。私たちはロボットの錆びついた足も忘れて、ぐいぐいと、錨をそぎ落としながら前に歩き、最後はもう逃げ足で私営霊園⁷を出た。

外は明るかった。ふつうの夜である。ゆつたりとした坂道を、ときどき自動車のライトが通り過ぎる。とりあえずふつうの世の中のようにである。

（尾辻克彦「父が消えた」より）

注1 金本位制……通貨の価値を金に裏付け、紙幣を一定の比率で金と交換できる制度のこと。本文では、お墓の大小がお金の多い少ないと結びついているといった意味。

注2 麻雀の牌……麻雀とは基本的に四人で牌を用いて遊ぶゲームであり、牌とは麻雀の対局で使うタイル状の駒のこと。

注3 マッチ箱を横にした形……横長の長方形の形。

注4 動産……物質的な財産のうち土地や建物ではないもの。

注5 不動産……物質的な財産のうち土地や建物。

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語 (その八)

問一 — 1 「私は思わず馬場君と顔を見合わせる」とありますが、この時の「私」の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次から選びなさい。

- ア やつとの思いで目的の場所についたものの入り口が閉まっていた。霊園の中に入ることもできない状況に寂しさを覚え、その思いを共有しようとする気持ち。
- イ 目的の場所に向かう道中でのんびりとしてしまったため到着した頃には入り口が閉まっていた。もたもたしていた自分の行動を反省しつつ、友人にも反省を促そうとする気持ち。
- ウ 目的の場所が見えてきて達成感をおぼえたが、入り口が閉まっていた。思っていたよりも時間が過ぎていたことに驚きつても状況のみこめず混乱し、その思いを共有しようとする気持ち。
- エ 目的の場所が見えてきて意気込んでみたが、入り口が閉まっていることに不意をつかれた。時間を確認しなかった自分たちの甘さを悔いながらも状況への不満を共有しようとする気持ち。
- オ やつとの思いで目的の場所についたものの入り口が閉まっていた。閉園時間を少し過ぎたくらいで門を閉めてしまう霊園側の対応に不満を感じ、その思いを共有しようとする気持ち。

問二 — 2 「小さな白いお饅頭のような顔である」とありますが、どのような様子ですか。最も適当なものを次から選びなさい。

- ア 夕暮れ時であるため、ドアの上の明かりの輪郭がぼんやりとして、焦りを感じさせるように光っている様子。
- イ 建設中の霊園であるため、ドアの上の明かりは立派なつくりではないが、かわいらしく光っている様子。
- ウ 日没の時間帯であるため、事務所の周囲に明かりがなくドアの上の明かりだけが頼りなく光っている様子。
- エ 閉園後に入園したため、ドアの上の明かりが人影のない場所に不安をおおるように光っている様子。
- オ 閉園後に入園したため、ドアの上の明かりが人の存在を知らせ、安心感を与えるように光っている様子。

問三 空欄 **A** に入る語句として、最も適当なものを次から選びなさい。

- ア おあつらえ向きの時間 イ 手に汗を握る時間 ウ 気がはやる時間 エ 泡を食う時間 オ 人目を忍ぶ時間

問四 — 3 「やはり何か不満な感じが残る」とありますが、このように「私」が思うのはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問五 空欄 **B** に入る語として、最も適当なものを次から選びなさい。

- ア 規格 イ 規則 ウ 信仰 エ 衰退 オ 見栄

問六 空欄 **X**・**Y** に入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを次から選びなさい。

- ア X 〓 生きている自分 Y 〓 死人 イ X 〓 死人 Y 〓 生きている自分 ウ X 〓 幽霊 Y 〓 生きている自分
- エ X 〓 死人 Y 〓 事務所の人 オ X 〓 生きている自分 Y 〓 事務所の人

問七 — 4 「ボソ？」とありますが、カタカナ表記されているのはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次から選びなさい。

- ア 「馬場君」は、「私」が言った言葉の意味は理解できるがその言葉が漢字と結びついていない状態であることを表現するため。
- イ 「馬場君」は、「私」が言った言葉はもともと知っていたが唐突な発言だったため理解が追いついていないことを表現するため。
- ウ 「馬場君」は、「私」が言った言葉の音は聞き取れてはいるが発言の意図が理解できていない状態であることを表現するため。
- エ 「馬場君」は、「私」が言った言葉の意味は理解できるが常識からかけ離れているので共感できていないことを表現するため。
- オ 「馬場君」は、「私」が言った言葉の音は聞き取れてもその意味する内容が結びついていない状態であることを表現するため。

問八 空欄 **C** に入る漢字一字を答えなさい。

問九 — 5 「でも面白いとは思わない？」とありますが、「私」がこのように言うのはなぜですか。最も適当なものを次から選びなさい。

- ア 都営墓地の規則のために一つの墓石でお墓を建てるしかなかった人々の思いが、長く連なる墓石のあり様から伝わるから。
- イ 都営墓地のお墓はバランスが崩れている「悪い墓相」であるので、裕福でない暮らしの原因となっていると考えられるから。
- ウ 都営墓地の規則に基づく墓石のあり様が、三段の墓石のそれぞれに意味を持たせる墓相の見方と偶然にも一致するから。
- エ 都営墓地の規則では小さいお墓しか建てられないが、そのことがかえって統一感のある「よい墓相」の墓になっているから。
- オ 都営墓地の墓石は全体的にバランスが悪く「悪い墓相」だと考えることは一般的なお墓の捉え方とかけ離れているから。

令和八年度 帝塚山高等学校入学試験問題・国語（その九）

問十 — 6 「だけどいっこうに恐くはならない」とありますが、「私」がこのように思うのはなぜですか。最も適当なものを次から選びなさい。

- ア 物陰がないから。 イ 友人が隣にいるから。 ウ 夢のような景色だから。
エ 墓石が少ないから。 オ 丘陵が続いているから。

問十一 — 7 「そこには何が潜んでいるかわからない」とありますが、「潜んでい」たものをたとえたものとして、最も適当なものを次から選びなさい。

- ア ロボットの足 イ 棒 ウ 新聞紙 エ 記念碑 オ 錨

問十二 — 8 「暗闇が緊張している」と表現技法が同じものを次から選びなさい。

- ア 鍋が煮えている。 イ 彼女は太陽だ。 ウ 人生は旅である。 エ 空が泣いている。 オ 雨が滝のようだ。

問十三 — 9 「やはり資本主義には幽霊が出る」とありますが、「私」がこのように思うのはなぜですか。最も適当なものを次から選びなさい。

- ア 資本主義においては富裕層が労働者からお金を搾り取りそのお金で立派な墓を建てるが、そのことで労働者から恨みを買って亡くなることが多いと考えられるから。
イ 生前に動産や不動産といった財産を持っている人は私営霊園で大きな墓を建てることが多いが、その墓の周囲は石垣や樹木の物陰が多く、幽霊の溜り場となると考えられるから。
ウ 私営霊園で立派なお墓を立てられる人は生前に財や人脈に恵まれた人であることが多く、そのことがかえってこの世への執着を強くし、未練を残して亡くなることになると考えられるから。
エ 墓相の見方によれば私営霊園の立派なお墓は動産・不動産の石ばかりが大きくバランスが悪いため、亡くなった人が成仏できずに現世にとどまることになると考えられるから。
オ 私営霊園で立派なお墓を建てられる人は生前に財産を多く所持しているが、そのことでかえって残された家族が亡くなった人に対して未練を残しやすくなると考えられるから。

